

コミュニティ防災の取り組みを普及 BOKOMIハンドブック&DVD

神 戸市独自の自主防災組織「防災福祉コミュニティ」、通称“防コミ”。防災訓練や地域福祉活動などと併行して、災害時に住民が力を合わせて身を守るよう、コミュニティレベルでの消火、救出や避難訓練などを行う組織だ。災害時に行政の支援を待っているだけでは、迅速な対応がとれない。だからこそ、コミュニティでの助け合いが大切だ。

この防コミの取り組みを開発途上国に伝え、広めてもらいたい。そこで神戸市とJICA関西/国際防災研修センター(DRLC)が協働で作ったのが、防コミのイロハが学べる英語のハンドブックとDVD。放水ホースがないなら協力してバケツリレーを、担架がないなら毛布を使って人が運ぶなど、住民の力とその場にあるモノを活用して非常時を乗り切る工夫が詰まっている。



各国の言葉で災害情報を発信 9カ国語の災害音声集

あ なたがもし、外国で災害に遭ったらー。その国の言葉が分からなければ、何の情報も得られず、路頭に迷ってしまうだろう。

災害時にはみんなに平等に情報が届けられるよう、ラジオ局など情報を発信する側の準備が大切。そこで世界コミュニティラジオ放送連盟日本評議会とJICA関西/国際防災研修センター(DRLC)が災害音声の入ったCDを作成。「ただいま震度6の地震が起きました」「車を運転中の人はすぐに止めて避難しましょう」など、災害の種類や場面ごとのアナウンスを9言語で収録した。

東日本大震災時には、各地に設置された臨時のラジオ局で、このCDを使って外国人のために災害情報が流されるなど、活用の場が広がっている。

楽しく知識を身に付ける ぼうさいダック スペイン語版

日 本で子ども向けの防災教育に使われているカードゲーム「ぼうさいダック」。一般社団法人日本損害保険協会が制作し、災害時にとるべき行動を遊びを通じて学べるものだ。

このアイデアを使って、エルサルバドルの青年海外協力隊員がスペイン語版を作成。例えば“地震”のカードの裏面には、頭を守るアヒルのポーズ。地震が起きたら机の下などに逃げ込み、落ちてくるものから身を守る大切さを教える。災害の絵を見せ、子どもたちが対応するポーズをとることで、次第に知識が身に付いていく。

これまで防災教材がほとんどなかったエルサルバドル。「文字が読めなくても分かりやすく、誰でも楽しめる」と評判を呼び、他の中米諸国へも広がっている。



東日本大震災の経験から学ぶ 防災教育マンガ

す ぐに子どもを抱いて、泣きながらひたすら走りまわりました。もう死ぬと思って。あんな津波から生き延びられたなんて、今でも信じられません]

東日本大震災発生から2カ月後、ビデオカメラの前で生々しい体験談を語るの、岩手県陸前高田市在住のフィリピン人女性だ。

これは、独立行政法人防災科学技術研究所とフィリピン火山地震研究所が行ったインタビュー。日本からの学びを、フィリピンの人々の防災意識の向上につなげたいと、東北3県に住む約50人のフィリピン人に聞いたストーリーをマンガで表現。読みやすく気軽に手に取ってもらえると好評で、フィリピン国内で防災教育の教材として使われている。



特集 防災
悲しみを繰り返さない

ニッポン発! /

お役立ち防災グッズ

災害時に大切なのは、自分で自分の身を守るという意識。日本の経験を防災力の強化に生かしてもらいたい。日本の協力をきっかけに生まれた防災グッズを紹介!

身近にあるもので手作りできる 雨量計・水位計

開 発途上国では、気象観測や予報の技術が進んでいない上、各家庭にテレビやラジオがあるわけではないため、なかなか情報が行き届かない。

コミュニティが独自に大雨を観測し、避難を促すことができれば、洪水や土砂災害から多くの命を守るはず。そこで、長年、防災分野の国際協力に携わってきた元JICA国際協力専門員の大井英臣さんが中心となって開発したのが、この手作り雨量計と水位計。雨量計は屋外に設置して降った雨の量を、水位計は川に設置して水位を観測し、危険数値に達したら“ビー!”と警報を発する優れものだ。

材料はプラスチックのボトルや弁当箱など、途上国でも簡単に入手できるものばかり。住民が自分で作って維持管理できるのもポイントだ。

